

Guojihua Shiye Zhong De
Ribenxue Yanjiu

东亚日本学国际研讨会论文集

国际化视野中

的

日本学研究

——纪念胡振平教授从教 45 周年

王铁桥 姚灯镇 主编

Dongya Ribenxue
Guoji Yantaohui
Lunwenji

南开大学出版社

Guojihua/Shiye/Zhong/De
Ribenxue/Yanjiu

东亚日本学国际研讨会论文集

国际化视野中 的 日本学研究

——纪念胡振平教授从教 45 周年

主 编 王铁桥 姚灯镇
副主编 何建军 盛文忠

南开大学出版社

天 津

图书在版编目(CIP)数据

国际化视野中的日本学研究:纪念胡振平教授从教 45 周年 / 王铁桥,姚灯镇主编. —天津:南开大学出版社, 2007. 10

ISBN 978-7-310-02759-0

I. 国… II. ①王…②姚… III. 日本—研究—文集
IV. K313.07-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2007)第 149334 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人:肖占鹏

地址:天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码:300071

营销部电话:(022)23508339 23500755

营销部传真:(022)23508542 邮购部电话:(022)23502200

*

河北昌黎太阳红彩色印刷有限责任公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2007 年 10 月第 1 版 2007 年 10 月第 1 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 20.25 印张 2 插页 581 千字

定价:45.00 元

如遇图书印装质量问题,请与本社营销部联系调换,电话:(022)23507125

东亚日本学国际研讨会

主办单位：中国日语教学研究会

洛阳外国语学院日本学研究中心

承办单位：洛阳外国语学院日本学研究中心

河南省高等院校日语教学研究会

后援单位（汉语拼音序）：

北京日本学研究中心

高等教育出版社

国际交流基金北京事务所

河南省教育厅

河南省高校外语教学委员会

卡西欧（上海）贸易有限公司

外语教学与研究出版社

日本国际交流研究所

日本侨报社

日中交流研究所

组委会成员：

主 任：胡振平

副主任：王铁桥 姚灯镇 许宗华 王松亭

成 员：肖传国 孙成岗 何建军 王超伟 李 森 贾友江

论文集编辑委员会：

主 任： 王铁桥（洛阳外国语学院 教授 博士生导师）

副主任： 姚灯镇（洛阳外国语学院 教授 博士生导师）

委 员： 许宗华（洛阳外国语学院 教授）

肖传国（洛阳外国语学院 教授）

孙成岗（洛阳外国语学院 教授）

李先瑞（洛阳外国语学院 教授）

何建军（洛阳外国语学院 副教授）

盛文忠（洛阳外国语学院 副教授）

前 言

早在上个世纪八十年代初,日本为了加快与世界经济体系的接轨,大力提倡各方面的国际化。进入 21 世纪以来,随着我国改革开放的深入,经济高速发展,我国各行各业的国际化水平正在不断提高。近年来,由于计算机网络的发展,各种网络通讯工具的发达,把世界各地的人们联到一起,不同民族、不同国家的人们的各种交往空前频繁而便利,不仅使全球一体化成为可能,而且,全球化的趋势已成为不可抗拒的潮流。

面临这种世界发展的趋势,在国际化的潮流中,如何以国际化视野开展日语教学和日本学研究,成为我们召开“东亚日本学国际研讨会”的中心课题。2006 年是我们洛阳外国语学院日本学研究中心成立 20 周年,也是中国日语教学研究会前会长胡振平教授从教 45 周年。为此,我们会同中国日语教学研究会、河南省高校日语教学研究会,于 2006 年 10 月 14 日、15 日联合举办了这次大型学术研讨会。邀请了东亚地区的日语教师和日本学研究者约 140 名,进行卓有成效的日语教学和日本学研究,具有共同特点的东方文化国家和地区的学者欢聚一堂,畅所欲言地研究日本,研究日语教学。两天的会议期间,来自国内外的专家学者以及日语教师们分组讨论,相互切磋,交流经验,大家都感到有很大收获。这次研讨会将对提高我国高校日语教学水平和国人的国际意识具有重要和深远的意义。

大会收到了 120 多篇论文和摘要,为了记录、保存这次大会成果以及今后的进一步交流,经过由洛阳外国语学院老师组成的论文集编委会的细心审阅,评选出 70 余篇编辑成了本论文集。所收论文涉及日本语言、日语教学和日本文学与社会文化等各个领域,深入探讨了国际化时代日语教学与日本学研究方面的各种问题,充分展示了我国日语教学和日本学研究的成果。主题演讲的论文中,宫岛达夫先生、池

上嘉彦先生、宿久高先生以及参加大会专题讨论的佐佐木瑞枝女士、日置弘一郎先生、伊津信之介先生的新观点、新成果，也将会对我国日语教育者和日本学研究者有很大启发。

我们对论文集入选论文，本着文责自负的原则，除个别文字和格式之外，对其观点未作任何改动；论文排列不分先后，基本上按作者姓名的拼音顺序编排。

在这次大会的准备和举办过程中，洛阳外国语学院科研部、外语教学与研究出版社、高等教育出版社、卡西欧上海事务所等单位给予了大力支持，在此论文集编辑成书过程中，承蒙洛阳外国语学院的专家教授审阅稿件，洛阳外国语学院的许多老师和洛阳大学、河南科技大学的老师和学生为大会和论文集都付出了辛勤的劳动，在论文集出版阶段，南开大学出版社的张彤女士、张华女士以及出版社的同志们为论文集的出版提供了大力帮助，在此，向他们表示衷心的感谢。

限于时间和水平，定有不少疏漏与不足之处，敬请读者批评指正。

东亚日本学国际研讨会论文集编委会

2007年6月于洛阳

目 录

認知言語学と日本語教育	池上嘉彦	1
日本語研究と国立国語研究所	宮島達夫	14
双方向のマルチメディア日本語教材の可能性		
——日本の文化をどう伝えるか.....	佐々木瑞枝	21
ビジネスにおける日本語.....	日置弘一郎	26
JPSOC.NET システムのあらまし.....	伊津信之介	28

日语语言篇

中国語・日本語・朝鮮語の東アジア言語における		
ある種の「音韻対応」(k・x-p)	安部清哉	31
類語辞書にみられる意味のとらえ方.....	陈 露	40
日語广告的动态语境分析	董 冰	47
日語介在性表达和人类转喻认知方式	付红红	55
日本語の再帰使役文に関する一考察	傅 冰	63
中日“拒绝请求”方式的异同	贾 丽	72
中国語と日本語におけるオノマトペについて		
——翻訳の立場から.....	姜 辉	80
新しい文法カテゴリーとしての動作パーフェクトの～		
テイルとその教授法.....	井上ゆみ	89
「V-なくしてほしい」から間接発話行為を見る…	李爱华 赵 平	97
依頼表現における附加表現の日中対照研究		
——大学生のアンケートに基づく分析.....	李 倩	106
認知言語学对日语词汇学习的启示.....	刘 俊	114
テ形接续与从句的构造	马兰英	123
逆接を表す接続助詞と接続詞の接点		
——「ところが」を中心に.....	马燕菁	133

「対等ほめ」の語用論的ストラテジーについて……………石金花	142
日本人の漢字使用における一側面	
——日本国字、国訓論議……………陶友公	151
时枝诚记的语言观——语言的本质和“语言过程说”……………宛金章	160
日语外来语的日本化	
——兼与汉语外来语的比较……………金 东 刘丽芸	168
日汉语“上、下”空间隐喻对称性考证	
——以时间域为中心……………王 磊	176
试论中日四字成语的差异……………王 锐	184
感動詞的な談話標識「まあ」の機能について……………魏金美	193
日本語対義語の有標性について……………吴 宏	201
日本語と中国語における上、下メタファーの認知的	
構造について……………徐 莲	210
日语格助词的语意解释与深层格……………徐 曙	218
モダリティに対する再認識……………徐 卫	230
意向性理论与时枝语法中的语言存在条件……………许宗华	238
日本語のスピーチレベルシフトに関する一考察	
——丁寧体 から普通体へのシフトと表現意図の	
関係について……………杨 敏	247
汉日零形回指探析……………杨秀云 胡以南	258
親族間の自称のルールについて……………姚灯镇	265
日中両言語における非言語コミュニケーション表現の対照	
——視線、ジェスチャー、顔の表情、身体接触を中心に	
……………张韶岩	275
モダリティ形式の流動性について……………张 兴	283
日语指称关系的功能分析……………郑宪信	294

日本文学篇

芥川龙之介的反战思想探析

——以《将军》、《桃太郎》为中心……………何建军	301
--------------------------	-----

中国大陆夏目漱石论文研究现状的定量分析·····	李光贞	310
本能主义者的破灭——《一个女人》女主人公早月		
叶子的形象解析·····	李先瑞	317
获生徂徕的诗学——以对明李攀龙、王世贞等复古主义的		
受容为中心·····	刘芳亮 胡乃花	225
「私小説」の発展における「平安女流日記文学」の役割		
——国民国家の角度から·····	刘金举	334
『水滸伝』の影響下の近世の読本について		
——『水滸伝』と『南総里見八犬伝』の比較を兼ねて···	刘青梅	343
不期然而然——读远藤周作的小说《武士》·····	路 邈	351
芥川龍之介における〈洛陽〉という場·····	秦 刚	359
『潮騒』から見る三島由紀夫の「生」の意識·····	任 玮	368
日本“家庭”文学的发展历程·····	史 军	377
『源氏物語』の青海波と時雨——礼楽思想の観点から		
·····	湯浅幸代	386
浄瑠璃作品における菅原道真像		
——『天神記』と『菅原伝授手習鑑』を中心に·····	姚伟丽	395

日本社会文化篇

近代日本語教育黎明期——宏文学院清国人留日学生を通して		
·····	酒井順一郎	403
对近代中国人留学日本发端问题的再认识·····	刘振生	414
名文士中江兆民——兼评其美学译著《维氏美学》·····	皮俊珺	425
黑格尔“东洋的专制论”与福泽谕吉的“文明史观”·····	屈亚娟	433
评吉野作造的“日中提携论”·····	王超伟 梁淑梅	441
二宮尊徳思想と儒教文化との関連		
——尊徳の思想と実践を通して見る·····	王铁桥 张文静	449
日本民间鬼故事特色分析·····	魏丽华	458
日本国家战略的几个特点·····	肖传国 梁淑梅	465
日本天台仏教における中国赤山神信仰·····	塩沢裕仁	474

中世の中国商人の博多滞在形態の変化……………	宇都宮美生	483
日本老人院调查报告及日本社会的思考……………	张长安	493
日本の近代化における「忠孝」道德の変容		
——明治維新から敗戦までの日本を中心に……………	张光新	502
介護保険制度およびその改革の行方について……………	张建华	508
中日の近代における西洋認識と洋学受容		
——渡辺崋山と林則徐を中心に……………	张卫娣	515
食俗諺の内容にみる日中食文化への一考察		
——「養、楽」の視点から……………	张文碧	524

日语教育篇

「大学日本語専攻四級試験」に関する分析

——文字・語彙・文法的内容的妥当性を中心に……………	董 杰	533
----------------------------	-----	-----

日本語教育における楽しい授業作りに関する研究

——日本語学科の初級授業を中心に……………	方英爱	542
-----------------------	-----	-----

教科書『みんなの日本語』の特徴…………… 鶴尾能子 | 551 |

聴解教材のデザインをめぐって…………… 侯仁锋 陆 曼 | 560 |

スピーチによる発話力の育成法

——教室活動を主として……………	李 旭	568
------------------	-----	-----

国際化の下での日本語音声教育…………… 凌 蓉 | 577 |

物語文の「語り」と「読み」…………… 守屋三千代 | 586 |

不確実性を表わす文末モダリティに関する一考察…………… 孙晓英 | 595 |

日语文言语法课教学与教材研究…………… 王军彦 | 605 |

第二言語習得における言語不安研究の史的考察

——その概念と理論……………	王玲静	612
----------------	-----	-----

基础外语教学中的自文化探索

——教师的角色和作用……………	詹桂香	621
-----------------	-----	-----

母国語干渉への思考…………… 赵 平 浦田千晶 | 630 |

認知言語学と日本語教育

東京大学／昭和女子大学 池上嘉彦

要 旨: 言語学のもっとも新しい流れとしての〈認知言語学〉の基本的な考え方を検討し、それが言語教育にもどのような新しい姿勢と視点とを求めることになるのかを考察する。研究対象として〈ことば〉だけに集中することでよいとして来た従来の言語研究に対し、〈認知言語学〉は〈ことば〉の在り方は〈ことば〉を使う〈ひと〉——とりわけ、〈ひと〉の〈ところ〉の働き——によって十分に〈動機づけられて〉おり、それとの関連で〈説明できる〉はずだという認識から出発する。日本語からいくつかの例を取りあげ、その有効性を検討する。

キーワード: 認知言語学、日本語教育、事態把握、意味、類像性、イメージ・スキーマ

0. はじめに

日本では2002年以来、文化庁の指導で日本語教師養成講座のカリキュラムに〈認知言語学〉が加えられることになった。認知言語学は現代言語学のもっとも新しい流れを代表するもので、20世紀を通しての言語研究で支配的であったやり方に対する批判的な考察やそれを越えての新しい方向の模索の試みが1980年代頃から少しずつまとまり始め、次第に大きなうねりとなって顕在化してきたものである。もともと言語のさまざまな側面の研究に取り組む人たちが（必ずしも互いに認識することなしに）抱いていた問題意識とそれを克

服しようとする試みから出発したものであるが故に、研究の対象についても、方法についても、細かい点にわたって既に明確な定説があるというわけではない。むしろ、人間の言語というものと取り組むことに関してもっとも適切なやり方をとっているという認識、およびその認識に基づいてどういう取り組み方をすべきかについての緩やかな合意をもとにして、従来の言語研究の成果を批判的に見返しつつ、理論的な枠組みの整理へと進んでいると言えよであろう。世紀の変わり目前後からは、認知言語学の全体像を提示しようとする概論的な書物の数もかなりふえてきた。新しい 21 世紀が進むにつれ、この方向への試みも加速することになるろう。

1. <ことば>と<ひと>、そして<こころ>——認知言語学の視点

言語学の対象は何か、という問いに対しては、当然、それは<ことば>であるという答えが予想できる。この答えはそれ自体もちろん間違っているわけではないが、それだけで十分か——つまり、<ことば>だけをそれ以外のものと切り離して扱うというようなことでよいのか——という疑念が残る。<ことば>は<ひと>によって絶えず使われるものである。それを使う<ひと>との関連をまったく考慮に入れないで<ことば>を考察するということが十分なのかという問題である。

一般に、<ひと>によって使われるものは、<ひと>との関わり方によってその<すがた>/<在り方>が決まってくるということがある。術語を使った言い方をすると、一般に、人間が創り出し、何らかの用途で使っているものであれば、「<機能>が<構造>を規定する」と言えるということで、このような考え方は<機能主義>と呼ばれる。例えば、椅子という人工物を取りあげてみると、その<機能>は人がそこに<心地よく座る>ということである。その<機能>に適うように、椅子にはその<構造>として<腰を降ろせるだけの広さの水平面>、<水平面を支える適度の高さの脚>、さら

には必要に応じて＜身体を後へもたせかけられる適度な広さの背＞、＜腕をのせることのできる両脇の部分＞などが用意されることとなる。言語についても、同じように考えてみるができる。どの言語にも、例えば、その言語なりの＜基本的語順が決まっている＞という構造的特徴が認められるものであるが、それが言語に課せられた、＜コミュニケーションの手段＞という＜伝達的機能＞と密接に結びついていることは、少し考えれば明らかである。つまり、もしそうでなかったとすると、僅か数個の単語から成るだけの短い文であっても、聞き手や読み手はそれら数個の語の間でどの語とどの語をどのように組み合わせて解釈すればよいのか、何十通りもの可能性をまず検討してみなくてはならず、それではとても能率的なコミュニケーションは期待できないことになる。また、言語には人間関係を調節するという＜対人関係的機能＞も課せられている。この点からいうならば、例えば相手に何か頼みごとをする場合には、短くて直接的な言い回しよりも、長くて間接的な言い回しという構造的特徴を持った表現が使われるというのも十分理由のあること——つまり、相手に対して過度に押しつけがましい接し方になってはいけないという配慮によって、動機づけられているということ——が分かる。

上の例からも分かる通り、＜ことば＞と関わる＜ひと＞を視野に入れて＜ことば＞を考えると、＜ことば＞だけを考察の対象にしている場合と較べて＜ことば＞の＜すがた＞がずいぶんと違ったふうに見えてくる。＜ことば＞の＜すがた＞（つまり、その構造的特徴）については、＜現にそのようになっているから、そのようになっているのだ——したがって、ただそのように＜記述＞しておけばそれで十分なのだ＞という考え方が主流であった。しかし、＜ことば＞を使う＜ひと＞を加えて考察することによって、＜ことば＞の＜すがた＞がそのようになっているのは、実は＜ことば＞を使う＜ひと＞の＜こころ＞の働きと関係して十分に＜動機づけられている＞、したがって十分に＜説明＞できるという認識に至るのである。（そし

て、ただ＜記述＞だけで終わるより、＜説明＞できるということの方が学問的に達成度の高いことは明らかである。）

以上の考察を踏まえて、＜認知言語学＞の基本的な学問的な姿勢を次のようにまとめることができる。すなわち、話し手がどういうことをどういうふうに捉えるか〔話し手の＜ところ＞〕によって表現の仕方〔使われる＜ことば＞〕も変わる、つまり、（＜ひと＞の）＜ところ＞によって＜ことば＞（の＜すがた＞）が動機づけられている、ということ——術語を使って言うと、「人間の＜認知＞の営みによって＜言語＞は動機づけられている」ということ——これが＜認知言語学＞が自らの対象とする＜言語＞についての認識である。

このような認識に立っての言語教育では、教える側に対しても、また学ぶ側に対しても、伝統的なやり方を越える新しい型の努力が期待されることになる。ある言い回しを取りあげ、それが正しいとか、正しくないとか、機械的にただ指摘するだけでは不十分なのである。そうではなくて、ある言い回しを選ぶ話し手の＜ところ＞（あるいは＜感性＞）がどのようなものであるかを説明し、それとの関連で適切さ、不適切さを論じるということになる。教える方の側について言うならば、教える言語の用法について正誤を判定する権威者であるかのように振舞うというのではなく、教える言語の話し手がある表現をするとき、その背後にある捉え方はどのようなものなのか、どうしてそのような捉え方をするのか——＜ことば＞の背後にある＜ところ＞にまでも関心を寄せ、その＜ところ＞を学習者に説明し、理解させようとする努力をしなくてはならないということである。＜ことば＞の背後にある＜ところ＞の営みには、使う＜ことば＞が異なっても同じ＜ひと＞であるということに由来する共通の部分も多くあるはずである。同時に、それぞれの＜ことば＞が育ってきたそれぞれの長い文化的伝統の違いによって、相互に異なる部分も多くあるはずである。今後、着実に発展していくグローバルな世界において、異なる言語の話し手の間の相互理解と安定した関係を実現するためにも、そうした方向での言語教育がますます

重要性を増してくることは間違いない。

2. <意味>の意味

<ことば>の研究に<ことば>だけでなく、<ことば>を使う<ひと>をまともに取り込むという姿勢が採られることによって、<認知言語学>では<意味>の研究の位置づけも従来とは大きく異なるものとなった。伝統的には<意味>は<ひと>の<ところ>に関係するものであるが故に、主観的で曖昧な対象であり、客観的で厳密な扱いが困難という認識が強く、言語学が科学性を志向するならば、客観的に扱えそうな言語の<形態>面の研究を優先させるのがよからうというのが通念であった。結果として、<意味>の研究は棚上げされるか、あるいは、せいぜい辞書に規定されているレベルのものだけを扱うか、あるいは、客観性を追求するあまり、<ことば>によって指される対象や事象そのものを<意味>とする、といったような考え方が採られてきた。これら三つの考え方のうち、第一のものはまず論外であるとして、残りの二つはいずれも<ことば>を使う<ひと>を排除して<ことば>を考えるという構図のもとでのみ可能であった考え方であり、それに由来する不十分さを多く内蔵していることは明らかである。古典的な例でいえば、「明けの明星」という表現も「宵の明星」という表現も同じ<金星>という対象を指しているという点では変わらない。しかし、だからといって、第三の考え方のように、この二つの表現の<意味>は同じと言うのは明らかにおかしい。同じように、第二の考え方についても「<ことば>は<ところ>に及ばない」という格言にも十分反映されている通り、<話す主体>としての<ひと>にとっての<意味>とは、辞書に<意味>として規定されている内容を遙かに越える豊かさによって特徴づけられている。辞書の規定は、<ひと>にとってのそのような豊かな内容から比較的共通し、安定していて社会的に<慣習>化していると思える部分を抽出し、<話す主体>を消去するという操作を経て得られるものに過ぎない。認知言語学が関心を抱く

のは、社会的慣習として固まる以前にそれらを生み出すもとなり、そしてそれ以後もそれに絶えず揺さ振りをかけている<ひと>の<こころ>の働き（<認知>の営み）である。<ことば>に託される<意味>は、話し手としての<ひと>が主体的に創り出すものであって、語られる対象や事象に初めから決まった形で内在しているものでもないし、また、社会的な慣行としてもとから定まっていて、社会の成員が絶対に従うことを期待されているようなものでもないのである。

以上のような認識に基づいて、認知言語学は<意味>の問題と関連して<話す主体>としての<ひと>の次のような振る舞い方に注目する。すなわち、言語の話し手は、同じ<モノ>（対象）、同じ<コト>（事象）であっても、それを自らの関心との関連でいくつかの異なるやり方で捉える（あるいは、意味づけする）能力を有しており、異なる捉え方（あるいは、異なる意味づけの仕方）に従って異なる表現の仕方を選択する、ということである。既に見た「明けの明星」と「宵の明星」もその一つの例であるし、同じことは、ある一人の人物について「狂人」、「変人」、「奇人」、「天才」など人によって違った言い方がされる場合、ある同じ一本の木について（かりにそれが<赤松>であるとして）、「赤松」、「松」、「木」、「針葉樹」、「植物」など、違った表現が適用される場合、あるいは、<コップを落として割った>という出来事を伝えるのに「コップが割れてしまった」とも「コップを割ってしまった」とも言えるとか、<太郎が次郎をなぐった>という出来事に言及して「太郎が次郎をなぐった」とも「次郎が太郎になぐられた」とも言える場合、など、いずれについても当てはまる。可能な選択肢のうち、どの表現の仕方を採り、どのような<意味>を対象、事象に読みとるかは、話し手が主体的に決めることである。

上で述べたことは、言語、および、言語の話し手一般について言えることであるが、個別言語について考える場合は、これに補足しておくべきことがある。すなわち、同じ対象、事象を言語化するに際していくつ